

グループ名	ユニット名等	科 目 名	担当教員名	対象学年次	学期
自己発見	2 単位 人間を知る	文化人類学	中島 洋	2 年次	春

授業のキーワード	文化とは何か。文化人類学とは何か。文化相対主義の限界は何か。文化と文明。
授業の概要	文化は気候、地理などの自然条件に大きく左右されて醸成されるが、固有の歴史、宗教などの社会条件も密接に関与する。また、外交や戦争など、他国との関係にも文化が深く関わることも知ろう。
期待される学習成果（目標）	いまや IT による情報の瞬時的かつ広範な拡散の中グローバル化が進む一方で、共通する歴史と文化に基づくローカリゼーションの台頭も見逃せない時代だ。「文化とは何か」を理解して、国際化の時代に対処できる素養を身に付けよう。

## 授業展開

	テーマ	内 容		テーマ	内 容
第 1 講	テーマ：文化とは何か。	文化人類学とは何か。文化人類学という「文化」とは何か。文化人類学どのように発展してきたか。そして日本文化の特異性についても考えてみよう。	第 9 講	料理と食材	伝統的な料理は伝統的な食材に依存し、伝統的な食材は自然環境に負うところが大きい。日本の食文化の変遷にも思いを馳せてみよう。
第 2 講	文化の特殊性と普遍性	それぞれの固有文化が持つ特殊性と、他の多くの文化に共通する普遍性について考える。文化人類学の中核、文化相対主義の限界は何か。さらには自分自身の思考軸・視点を知ろう。	第 10 講	異文化との接触	異文化と接触したとき、何が起るか。異文化の受容と拒否について考えてみよう。
第 3 講	新聞と文化	文化が異なれば、新聞の紙面も異なる。日本語の新聞と英語の新聞を比べてみよう。さらに情報を客観的に判断する能力を高めよう。	第 11 講	自然条件と生活様式	人間は自然条件に適合して生きてきたが、社会の近代化と自然環境の変化は、生活様式をどのように変えるだろうか。
第 4 講	言語と文化	世界に何億人にも使われている言語と、数百人にしか使われていない言語がある。言語の発生と消滅について考察する。	第 12 講	移民	かつて日本は移民を送り出す国だったが、いまや海外から流入する外国人に対応する時代だ。海外からの移民はどう対応するか、諸外国の例を考察しながら考えよう。
第 5 講	海と人間	海は人間のためにさまざまなものを生み出し、また、自然環境にも大きな影響を与えている。海と人間の関わりを考究する。	第 13 講	外交	文化、宗教、イデオロギーの違いが外交を複雑化する。日本の外交の高度化は何か必要か。インテリジェンスについても考えよう。
第 6 講	育児と教育	育児も教育も文化圏ごとに異なる。どのような差異があるか。母系制社会と父系制社会についても考える。	第 14 講	戦争	戦争はなぜ起こるのか。その原因を考え、平和の維持は何か必要か考察する。
第 7 講	姓と名	本来、姓や名は出自を表し、祖先からの系譜を共通にする人々が一つの集団を形成していた。しかし、職業や出身地を表す姓もある。また、姓のない民族もある。	第 15 講	講義の総括	各自の課題（宿題）および第 1～14 講までの総括
第 8 講	地球温暖化と縄文の海進	地球温暖化による海面上昇と縄文の海進を比較して考えてみよう。今後の海面上昇は、世界に何をもたらすだろうか。	定期試験		文化の醸成は主として何に基づくか、文化相対主義とは何か、その限界は何かを問う。ただし、講義の進
	評価方法	試験または論文の評価 60%。授業への取り組み（受講態度、課題を含む）40%。			
使用する教科書（必ず購入してください）			参 考 文 献		
なし。毎回レジュメを配布する。			ルース・ベネディクト『菊と刀 日本文化の型』講談社学術文庫。 サミュエル・ハンチントン『文明の衝突』集英社。 古田博司『日本文明圏の覚醒』筑摩書房。		